

佳作

## 心づいた江戸むけひがらじやん

千葉県 市川市立幸小学校二年 菊地 隆太

「明日は、まちにまつた日本のれきしを教えても  
らえる日だ」と、前日からウキウキしていた。

れきし好きのぼくは、ガイドさんにばくまつのれ  
きしがのこる場しよを、あんないしてもらった。

その中で一番心にのこった場しよは、東京とみな  
とくの「あたごじん社」である。

ぼくは、あたごじん社のちよう上から町を見下ろ  
した。きれいなビルがたくさん見えた。けれど、ビ  
ルがじゃまで東京の町全体をよく見ることはできな  
かった。だがそれは、み来へすすむためのけ色な  
のだ。

一八六八年三月十四日、かつ海しゅうと西ごうた  
かもりは「江戸むけつかいじょう」にむけて話をし  
た。それにより、あらそいなく、時だいがかわって  
いった。その前日、かつ海しゅうと西ごうたかもり

は、あたごじん社から、江戸の町を見下ろし、

「こんなにも人がたくさんすんでいて、きれいな江  
戸の町を火の海にしてはしのびない。」

と、話をしていただとガイドさんから教えてもらった。

二人とも同じ思いになったので町がすくわれたの  
だろうと思った。

この話をしつて、むかしの江戸がどのような町で  
あったのかすぐく気になった。

二人とも、新しい日本を作るために、人をしなせ  
てはいけないという心をもっていたと思った。その  
心が今のぼくたちの、あん心あん全なくらしにつな  
がっていると考えると、うれしくてなみだが出て  
来た。

江戸の町を火の海にしたくないということは、そ  
の時すんでいた百万人の人が、これからも元気です  
ごしていられるといういみだと思った。

ぼくが、江戸にすんでいて、二人の話を聞いてい  
たら「ありがたきお言ば」と言っていたはずだ。

もし、江戸むけつかいじょうがなかったら、日本  
は外国の国になっていたかもしれない。日本の首と  
が東京ではなかったかもしれない。ぼくは、そんざ  
いしなかったかもしれない。

立っている。生きている今、二人が来たあたごじん社にぼくは